外務省

Ministry of Foreign Affairs

専門職員
採用案内

MOFA

●東京メトロ霞ケ関駅下車、A4またはA8出口すぐ

〒100-8919　千代田区霞が関2-2-1
Tel　03-3580-3311(代)

外務省ウェブサイト
http://www.mofa.go.jp/mofaj/

携帯電話対応ウェブサイト
http://www.mofa.go.jp/mofaj/m/
右記のQRコードもご利用ください。

外務省

Ministry of Foreign Affairs

専門職員
採用案内

地域・言語・専門分野のスペシャリストとして、外交の最前線へ

Introduction

外務省専門職員は、高い語学力を有し、関連する国・地域のスペシャリスト、あるいは条約、経済、経済協力、軍縮、広報文化などの専門分野のスペシャリストとして活躍することが期待されています。海外においては、日本の外交官として相手国政府との交渉や政治・経済その他の情報の収集・分析などに携わり、本省においては、その専門的知見を活かして外交政策の企画・立案に携わります。

外交は最終的に「人と人」。
一人一人の仕事ぶりが国益を左右するといっても過言ではありません。
よりよい未来を切り開くために、一人一人が世界的な視野で日本の国益を考え、世界各地の多様な現場で自己の能力や専門性を最大限に発揮してチームの一員として日本の外交を支えていくことが必要です。
常にチャレンジし、自分を成長させながら、「日本のために働く」という充実感とやりがいは、何物にも代えがたいもの。
外務省は、日本のために働きたいという強い使命感と情熱、そしてあくなき向上心を持った皆さんの挑戦を待っています。

Contents

若手省員の声 …… *p2*

～二国間外交に携わる～

欧州局 西欧課
外務事務官
斉藤 仁美

在インド日本国大使館
三等書記官
堀川 雄吾

南部アジア部 南東アジア第一課
外務事務官
ミャンマー語通訳担当官
小山 智史

アジア大洋州局 中国・モンゴル第一課
外務事務官
中国語通訳担当官
松村 智美

～マルチ外交に携わる～

国際協力局 国別開発協力第三課
外務事務官
河本 健志

経済協力開発機構 日本政府代表部
三等書記官
鬼頭 恵美

スペシャリストへの道 …… *p12*

～地域・言語・専門分野のスペシャリストとして活躍する～

国際協力局
気候変動課 課長補佐
川村 真紀

中南米局
中米カリブ課 地域調整官
牧内 博幸

北米局
日米安全保障条約課 課長補佐
細野 淳一

在サンフランシスコ日本国総領事館
領事
早川 瑞穂

在ジュネーブ国際機関日本政府代表部
二等書記官
白石 知子

軍縮不拡散・科学部
軍備管理軍縮課　課長補佐
西田 充

研修制度 …… *p8*

魅力的な人材は外交の基礎。スペシャリストとして、グローバルに活躍する外交官を育てる外務省の研修制度を紹介します。

Training Report

在外研修レポート *p10*

語学力を磨き、外交官として必要な知識を身につける在外研修。

18 私のキャリアパス
在リトアニア日本国大使館　特命全権大使
白石 和子

19 人事担当者からのメッセージ
大臣官房人事課　調査官
伊藤　眞

20 仕事のフィールド・外務省専門職員 Q&A

21 採用情報

二国間外交　研修語 / スウェーデン語

北欧のスペシャリストとして、二国間関係の一層の深化に貢献していきたい。

本　省　欧州局 西欧課
外務事務官
斉藤 仁美

2004年入省。
スウェーデンで在外研修後、在スウェーデン日本国大使館で勤務。帰国後、2013年から現職。

3年サイクルで異動があり さまざまな仕事を経験

民間企業では入社時にある程度担当業務が確定することも多いですが、外務省では専門職員でも２～３年ごとに部署の異動があり、さまざまな仕事を経験できることが魅力のひとつです。私は今、欧州局西欧課の北欧・バルト班に所属し、スウェーデン、ノルウェーとリトアニアを担当しています。特に担当国との二国間関係の業務を中心に、外交政策の立案、要人往来への対応をはじめ、省内外からの各種照会への対応などを行っています。

担当国の要人が訪日した際には、日程作りや会談の準備、同席など多様な仕事に関与するので、外交の表舞台を垣間見る経験ができます。苦労する点は、複数の国を担当しているため、各種政策や最新事情を常にフォローすることが難しいことでしょうか。ときには業務が重なり、多忙を極める場合もあります。

在スウェーデン大使館主催の東日本大震災追悼レセプションでは司会を担当。

スウェーデンでの能公演の開催など 思い出に残る仕事はたくさん

現職の前には、在スウェーデン大使館で儀典担当をしていました。大使公邸での会食やレセプションの準備を含めた事務、そして日本の皇室とスウェーデンの王室関係に関する仕事です。文化事業として実施した能の公演も思い出深いです。会場を確保し、能の舞台設置に必要な技術的な点も含めて会場と能の一行との間を仲介するなど、準備がスムーズに進むよう努めました。スウェーデン人が関心を持って公演を見に来てくれ、大きな劇場がほとんど埋まるほどの集客もあり、とてもやりがいを感じました。

在外公館では、研修語のスウェーデン語を使う機会も多く、充実した時間を過ごすことができました。研修語は、休日に文法や語彙力を増やす問題集を解くなどして、語学力の維持に努めていました。日本に戻ってきてからは、研修語に触れる機会も少なく語学力の維持が難しいですが、スマホに研修語の新聞アプリを入れて通勤時に確認したり、ラジオを聴いたりして語彙を増やすように努力しています。

スウェーデンで観光展を実施し、現地の旅行会社や現地ボランティアの方とともに。

Q 専門職員の試験のために、どんな準備をした？

外務省を意識したのは高校生のときです。大学では国際関係を専攻し、専門職員受験用の予備校にも通いました。試験科目を基礎から学び、論点集をまとめたり知識を深めるとともに、試験の形式に慣れるようにしました。

海外の高校を卒業したので、日本の高校で学ぶことをベースにしている各教養科目では、さまざまな新しい内容をはじめ、各教養科目の専門用語の和訳を覚える必要があり苦労しましたね。得意分野の問題集を中心に、クイズ感覚でたくさん問題を解いて頻出事項をカバー。語学試験（英語）は、試験直前に外交青書とその英訳（Diplomatic Bluebook）などを読み、専門用語の習得に努めました。

二国間外交　研修語 / ヒンディー語

インドは広く、理解が難しい。だからこそ大きな手応えがあり、インドを知り尽くすスペシャリストになりたい。

2009年入省。
インドで在外研修後、2012年から現職。

在外公館　在インド日本国大使館
三等書記官
堀川 雄吾

日本の課題に向き合うため 民間企業から外交官へ転身

入省前は民間企業で、各国企業からのインターンシップ生の受け入れなどの窓口業務を担当していました。特にアジアの方が多く、彼らとの交流が深まる中、自国の将来や世界の抱える問題に真剣に向き合う姿に大いに刺激を受けました。自分も日本や世界が直面する課題の解決に貢献できればと思い、外務省を志望しました。

現在の仕事は大きく分けて、文化業務とプレス業務の２つです。文化業務では、主に日本文化を海外で広め、交流を盛んにするイベントの企画運営を行います。例えば日本映画の上映会や折り紙コンテスト、日本文化祭などの大型行事を企画することも。伝統文化から最近のポップカルチャーまで扱う範囲は広く、文化のすべてが対象です。プレス業務ではそれらの行事を効果的に宣伝し、適切なタイミングで情報を流します。また、インドメディアで日本全般がどう報じられているか、論調を分析することも重要な仕事です。

隠れたメッセージを読み解く 広い知識の引き出しも必要に

私の研修語であるヒンディー語では、インドを「アネークター　メン　エークター（多様性の中の統一）」と表現することがあります。広い国土に文化的背景の異なる 10 億人以上の人々が暮らし、知りつくすことは並大抵ではありません。

日頃の業務では、幅広い知識の受け皿を作っておくことが必要です。政治家が歴史上の著名人の言葉を用いたスピーチを行った場合、インド史を知らなければ隠されたメッセージを読み取れず、真意を取り違える可能性もあります。日頃から知識の引き出しを数多く用意し、状況に応じて適切に対応する、まさにこれが専門職員としての醍醐味ではないでしょうか。インドは日本の重要なパートナーであり、日印関係は急速に発展しています。インドなら分からないことはない、と言えるくらいのスペシャリストになり、両国の絆の深化に少しでも貢献できればと思います。

もっと日本を知って欲しい！
そんな思いを込めて学生へ日本グッズを配布。

Q 在外公館の勤務の中で、思い出に残っている仕事は？

インドでは「スーラジ　ザ・ライジング・スター」というテレビアニメが人気です。これは日本アニメの名作「巨人の星」をインド向けにインドの国民的スポーツであるクリケットに変えて、日印両国のアニメ製作会社によってリメイクされたもの。このアニメの完成記念披露レセプションを大使公邸で開催することになり運営を担当しました。

日系企業や広告代理店と連携し大型液晶パネルを特設、インド映画会（ボリウッド）の有名女優を特別ゲストとして招待するなどの工夫を施した結果、イベントは大成功となりました。メディアでもたくさん取り上げられ、いい思い出になっています。

運営に力を入れレセプションは大盛況で、大きな注目を集めた。

二国間外交通訳

研修語 / ミャンマー語

とにかくミャンマーが好き。その強い気持ちは変わらず仕事のモチベーションに。

本 省　南部アジア部 南東アジア第一課
外務事務官
ミャンマー語通訳担当官※

小山 智史

2004年入省。
ミャンマーで在外研修後、在ミャンマー日本国大使館で勤務。帰国後、大臣官房総務課での勤務を経て、2011年から現職。

※大臣クラス以上の通訳を務めることが期待されている省員を通訳担当官として認定する省内の制度。

初めての海外旅行でこの国に関わりたいと思う

私は外国語大学に入学する際、特に希少そうなミャンマー語に魅力を感じて専攻しました。生まれて初めての海外旅行先はもちろんミャンマーで、当時まだ軍事政権時代でしたが、負の要素をまったく見せずに活き活きと暮らしているミャンマー人に感銘を受けたのを覚えています。その時、漠然とこの国と関わる仕事をしてみたいと思いました。

現在は、日･ミャンマーの外交関係全般、特に政治分野と文化交流分野を担当し、会談などの通訳もしています。最近、日ミャンマー関係が緊密化し、多忙を極めていますが、ミャンマーが好きなので、モチベーションを維持することができます。テレビもミャンマー関連の番組は必ず録画してチェックし、定期的に東京のミャンマーレストランで食事をしたり、在日ミャンマー人の友人に接する機会を増やしたりしていると、研修語を磨くことにも役立ちます。

また、ミャンマー・ロックをカラオケで歌う訓練も語学力向上に一役買っています。憧れのロック歌手と知り合う機会にも恵まれ、家族ぐるみの付き合いをするまでになりました。

知るほどに強くなる興味と愛情両国の交流の役に立ちたい

外務省では、自分が企画した案件が次第に大きくなり、最後は一国の元首まで関わってくることがあります。また、在外公館の仕事は、最前線で時代が大きく動く場面を目撃できると言う意味で非常にやりがいを感じます。

通訳者としてはまだまだ未熟です。日本語で短く表現できる言葉がミャンマー語にはないときなど、説明するためつい発言が長くなってしまったり。それが二国間の将来を左右するかもしれないので、言葉の重みに緊張しますが、そこに関われることは非常に光栄なことだと思います。

入省後、ミャンマーに約5年(最初の2年は大学での語学研修、後の3年は大使館勤務)滞在しましたが、ミャンマーへの思いは変わらず、むしろ愛着がより深くなりました。ミャンマーを知れば知るほど、日本を含む国際社会が持っているミャンマーの印象と実像とがかけ離れていることに気づかされます。日本の国益のために働きながら、ときにはミャンマーの立場に立って、日本がミャンマーを正しく理解できるようなイベントなど、両国の交流が進むアイデアを出していきたいと考えています。

2013 年、国連総会の際に行われたワナ・マウン・ルイン・ミャンマー外務大臣と岸田文雄外務大臣の会談の通訳を担当。

妻もミャンマー好き。一緒に民族衣装を着用して。

Q 自分にとってのターニングポイントは？

在ミャンマー日本大使館に勤務を開始した2007年、現地で大規模な民主化デモが発生し、治安当局とデモ隊の衝突で多くの逮捕者が出ました。夜間外出禁止令が発令されたため大使館から出られず、1週間ほど寝泊まりすることに。外交の最前線で働くということの重責を実感しました。

また、2008年には大型サイクロンがミャンマーを襲い、たくさんの犠牲者が出ました。自分の家や大使館自体も被害を受けましたが、日本の支援が迅速に届き、被災した方々を救うことができたこと、その一端に自分も関われたことは非常に有意義な経験でした。

二国間外交通訳

研修語 / 中国語

近いようでまだ理解されていない日本を伝える仕事がしたくて、日中関係の最前線へ。

本 省　アジア大洋州局 中国・モンゴル第一課
外務事務官
中国語通訳担当官

松村 智美

2003年入省。
中国で在外研修後、在中国日本国大使館で勤務。帰国後、2010年から現職。

2012年、中国を訪問中の玄葉光一郎外務大臣(当時)と楊潔篪中国外交部長(当時)との会談の通訳を担当。

中国に留学したときの体験が外務省を目指すきっかけに

私は大学時代に中国語を学び、中国へ1年留学していました。そのとき大学の先生から、日本は軍国主義化するのではと真剣な顔をして言われ、愕然としたのを覚えています。中国では大学教授という地位にある人ですら、隣国である日本をこんなにも知らないのかと。そのことをきっかけに、対中国との最前線で日本という国を伝えていく仕事がしたいと考えるようになりました。

現在は、日中関係における文化、海洋関係業務を担当しています。具体的には、日中有識者会合の企画・運営や、海洋分野での懸案・協力に関する事務、また各種会談や会見、協議の際には通訳もしています。

早い時期から海外へ飛び出して自分を磨くチャンスが与えられる

自分個人の役割は小さなものでも、日々動いていく二国間の最前線に身を置いて仕事ができるということは、外務省の魅力の一つだと思います。中国語をベースにしながら、中国に対する理解を深めるべく、絶えず勉強の日々です。

また、早い時期から海外での生活を経験して、外国語を含む多くのことを学ぶチャンスが与えられます。私の場合は、入省2年目から中国へ赴任し、北京大学での2年の在外研修を経て、在中国大使館で4年間勤務しました。在中国大使館で勤務していた際、北京オリンピックの時期に日本をスポーツとともに紹介する現地のテレビ番組に出演し、直接中国語で発信する機会を得ました。これは、日本を伝える仕事をすることが外務省を目指すきっかけだった私にとっては刺激的な仕事でした。このような仕事を通じて、外国との相互理解を深めるということは、その前提として自分の国をよく理解することが必要であることを感じました。

私はこれまで、日中首脳間の立ち話や日中外相会談の他、各種協議における通訳を経験してきました。できるだけ完璧に近いところを目指して最大限準備し、本番で自分の力を出し切れたと感じられたときには、何とも言えない達成感があります。学生時代は自分のためだけに勉強してきた中国語が、今は国家間の対話のために活かすことができる。その責任の重さに身の引き締まる思いがしますし、そこに通訳官としてのやりがいがあるように思います。

日本にとって中国との関係はとても重要であり、また様々な難しい問題を抱えるがゆえに、通訳として重いプレッシャーを感じる場面もあります。特にハイレベルの会談、会見などの通訳を担当するときは、発言者の意図を正しく中国側に伝達するよう、細部に至るまで神経を使うことが求められ、緊張で前夜はよく眠れないこともあります。そこでプレッシャーを克服し、結果を出すためには、努力に裏付けられた自信を持つことしかないと自戒の念を込めてそう思います。

Q 通訳という仕事のために、いつも意識していることは？

常に持って活用している▶
通訳する際の必需品たち。

通訳としてまず必要なのは、「話し手の意図を正しく理解する」「正確に訳す」の2つだと思います。重要な会談で、情報を正しく伝えるのは本当に責任の重いこと。正確さへのこだわりが自分の成長につながります。また、日本の立場や、発言者の気持ちがきちんと伝わるよう、その場面に応じて、時には毅然と力強く、時には和やかに雰囲気も含めて伝えられるようになることが理想です。

通訳能力の向上のためには、当然ながら中国語能力が基礎となります。日頃は、出勤途中に中国語ニュースを読んだり聞いたりする他、常に中国語表現を意識して生活するようにしています。中国だけでなく、日本で起こっている事象を中国語でどう表現すればいいかも考えていますね。辞書は必ず持ち歩いていて、あれ？と思ったらその場で解決するよう心がけています。

現地語ができるからこそ得られる信頼と刺激。大切な人との出会いにも恵まれる。

2007年入省。
イランで在外研修後、在イラン日本国大使館、在アフガニスタン日本国大使館で勤務。帰国後、2013年から現職。

本　省　国際協力局 国別開発協力第三課
外務事務官
河本 健志

アフガニスタンのカルザイ大統領と。

中東での経験で身に付けたものが政策決定に必要な情報になる

外務省専門職員採用試験を受験した時には、予想できなかった人生を送っています。希望言語ではなかったペルシャ語を学び、イランやアフガニスタンでの大使館勤務を終えて、今は中東、アフリカ、欧州へのODAを担当する国際協力局 国別開発協力第三課において、イランとヨルダンへの経済協力全般に携わっています。特にイランに関しては、現地での勤務経験で身に付けた土地勘や特殊事情への理解を活かしながら、政策決定に必要な情報を提供できるため、日本の対イラン外交における経済協力分野に関わっていく仕事の面白さを日々感じています。

現在の本省勤務の直前には、アフガニスタンの日本大使館において、アフガニスタンの復興・開発について、各国外交官や国際機関職員、アフガニスタン人と一緒に考え、行動してきました。私は、ペルシャ語に近い言語を話すアフガニスタン人と直接会話ができたため、現地語ができるからこそ得られる情報があり、また政府高官との信頼関係も作れたと思っています。

大切なのは折れない気持ちと逆境を順境にできる心の余裕

国家予算を使ってODAを実施していくこと、現地の人々の生活に大きく影響する国家政策の議論に関与していくことは重い責任を伴いますが、一方で、これほどに面白いと思える仕事も他にはなく、やりがいのある大変有意義な時間を過ごしています。

外務省の仕事の面白さをより深化させ、厳しい局面を乗り越えるためには、人との出会いが大切だと思います。私はどの職場でも、頭脳明晰かつ人格者で尊敬できる上司、仕事以外にスポーツや文化活動にも秀でた同僚に恵まれました。加えて在外公館勤務では、各国外交団や現地政府関係者、仕事の内外で知り合った邦人の方との出会いがあり非常に刺激的でした。

私たちの仕事は多岐にわたるだけでなく、高い専門性が求められます。折れずに信じ続ける精神力と逆境を順境に思える心の余裕があれば、外務省において自分の人生を豊かにし、やりがいを感じられることは間違いありません。

日本が支援しているカブールで子供たちと一緒に。

Q 在外公館の勤務で経験した、一番の苦労とは？

特にアフガニスタンでの勤務は、身体的・精神的負担を伴ったことは事実です。突発的に発生するテロ事件により、避けることのできない恐怖を日々感じ、行動制限がある中での厳しい仕事でした。大使館がタリバーンによる攻撃を受けた時は、近くに着弾する衝撃を受けながら、この先どうなるかわからない恐怖感に襲われたことを鮮明に覚えています。しかし、本省からの支援と大使館幹部のリーダーシップの下、館員とアフガン人大使館職員が一丸となって冷静に行動することにより、どんな難局も乗り越えられると確信した場面でもありました。

「JAPON」の代表として自分が発言することの重責と、大きなやりがいを感じる。

在外公館　経済協力開発機構 日本政府代表部
三等書記官
鬼頭 恵美

2006年入省。
フランスで在外研修後、在カメルーン日本国大使館で勤務。復興庁への出向を経て、2012年から現職。

Q 外務省で働いてみてわかったことは？

正直、就職活動中にたまたま説明会に行くまで、外務省の具体的な仕事のイメージはわいていませんでした。入省してやりがいを感じることも、自信をなくすこともありますが、自分のレベルのはるか上の仕事に携われる面白さや、常に学べる楽しさ、日本、二国間、マルチとさまざまな舞台で仕事ができる職場だということを実感しています。

世界中が職場で、男女関係なく機会が与えられるので活躍の場は広いと思います。また、育児休暇などの制度も充実していて、家族を大事にしながら活躍している女性の先輩たちを見ると励まされます。

今の職場であるOECDのシャトー。いかにもフランス！という雰囲気。

戸惑い、アウェーを感じることや自分の力不足に悩むことも多い

小学生の時にアメリカに住んだことがあり、漠然と英語を活かして国際的な仕事がしたいと思っていました。現在は、パリにある経済協力開発機構(OECD)代表部で、投資委員会と人事を担当しています。OECDの委員会は、パリ本部での会議の他、世界各地で会議やイベントなどを行っており、私自身もベトナムで実施したカンボジア、ラオス、ベトナム、ミャンマーの投資政策立案セミナーに参加する機会がありました。

以前の在外公館勤務経験は在カメルーン大使館のみで、これまでカウンターパートや相手国がはっきりしていたのに比べ、国際機関の代表部では様々な関係者が会議場内外で発言や接触をします。最初は仕事の進め方がわからず、アウェーを感じることも多くありました。また、会議資料ですら理解に苦しむ自分の力不足を感じることも多々あります。

日本の代表として関わり流れを作ることの面白さ

代表部の仕事は「会議」のみでなく、実際には、どのような議題を扱うかというところから、資料を読んで理解し、その上で日本の立場や発言ポイントを作成するところまで、すべてが重要です。色々な情報や資料が出てくる時点で、既に議論の方向性がついていたりするため、日頃からアンテナを高くし、日本の考えを伝えて全体の流れを作る「攻め」の姿勢も大事だと思います。

日本としてどうしたいのか、何がためになるのかを考える一連の作業は、終わりがなくて難しいです。一方で、会議場は現場ではないですが、現実の世界とリンクして何かしらの役に立っていると思えた時にやりがいを感じます。今でも、会議で「JAPON」のフラッグを立てて発言する時は緊張しますが、日本の代表として関わっていることを感じ、頑張ろうというモチベーションが高まります。

日本がOECDに貢献するとともに、日本にOECDを知ってもらい、また、活用してもらうために微力ながら精一杯頑張りたいと思っています。

OECD事務局の廊下には、設立50周年記念ロゴの一部である虹色が飾られている。

最初から外交のスペシャリストなどいない。
常にチャレンジし、
自分を成長させていくなかで
可能性は拓かれる。

入省前

専門職員は、約40言語※の中から、希望や適性などを考慮して研修語が割り振られます。英語やフランス語といったなじみ深い語学から、初めて触れるような語学まで、研修語とのお付き合いの開始です。

※試験の合格者に割り振られる研修語は毎年異なります。詳しくは、毎年４月頃に配付される外務省専門職員採用試験案内をご覧ください。

入省１年目

入省直後の4月は、外務省研修所で実務や教養とともに、研修語の学習に取り組みます。5月からは本省で実務研修があり、翌年3月末までの11ヶ月の間に1～2課に配属され、本省での仕事を覚えます。その間も中期語学研修として、週に2回、半日の語学研修があります。特殊語学の場合、研修も講師との間でマンツーマン。真剣な語学の訓練です。

入省2年目

3月末に実務研修が終わると、4月からは、再び外務省研修所で合宿形式の集中研修を行います。ここでは約3ヶ月の間、語学と外務講義などの研修を受けて、外交官として必要な基礎的知識を身につけます。なかでも最も重要なのは語学で、入省時には初学の語学であっても在外研修前には一通りマスターすることが求められます。

入省2年目の夏以降

集中研修が終われば、いよいよ海外へ。現地の語学学校や大学などで研修語に磨きをかけるとともに、その国の歴史、政治、経済、社会、文化などの諸事情を学び、専門職員としての専門性を造り上げます。２年間（アラビア語研修は３年間）の在外研修を通じ、世界の様々な人や文化と触れ、自分を成長させることができます。

研修制度

外交は最終的には人と人との関係。
魅力的な人材は外交の基礎であり、
外務省では人材育成に力を注いでいます。
特に専門職員は、早期に語学をマスターし、
外交官として独り立ちすることが
求められています。

多言語の飛び交う空間で、刺激に満ちた毎日を送る

入省1年目

2013年入省
中東アフリカ局中東第二課
外務事務官

川上 誠一

研修語：アラビア語

私は2013年にアラビア語の専門職員として採用され、現在中東第二課で研修しています。大学時代のクウェート留学で親日感情の高さに触れたことをきっかけに、大学で学んだアラビア語を駆使して日アラブ関係構築の場で自分の力を試したいと考え、外務省を志しました。

中東第二課での研修は、刺激に満ちています。確かに、1年目の新入省員として出来ることは限られており、地味で体力を要する業務も多いです。国会の会期中は深夜まで省内に残り、朝日を見ることも珍しくありません。一方、課内全体の業務補佐を通じて先輩方の仕事ぶりを一つ一つ観察できるのは研修生の特権です。課内では日常的にアラビア語やペルシャ語が飛び交っています。同じ中東地域を専門とする先輩方が、流暢な外国語と担当国についての豊富な知識を駆使し、身を削って中東諸国との関係構築に邁進される姿を見るたびに、私もこのような仕事がしたくてここに来たのだとの思いを一層強くします。

今後は、ヨルダンで3年間の在外研修を行います。言語のみならず、歴史・宗教を通じてアラブ人の考え方を今一度勉強し、日アラブ間の友好関係促進に貢献できる人材に成長できるよう、自己研鑽に励みたいと思います。

モチベーションの高いドイツ人と共に学ぶ、恵まれた環境に感謝

入省2年目

2012年入省
在ドイツ日本国大使館
外交官補

長谷川 瑠美

研修語：ドイツ語

ハイデルベルク大学の政治学科でEUやドイツの政治システムなどを勉強しながら、日独通訳学科の授業にも参加しています。研修の第一目的は語学力の向上ですが、政治、社会、経済、文化など広くドイツを理解することが求められています。授業は大変ですが得るものが多く、自分の知識不足を見直すよい機会となっています。

通訳学の授業では、環境問題、政治、経済、日独関係などさまざまなトピックを扱い、スピーチの通訳など実践的な勉強ができます。意識の高いドイツ人と授業の合間に自主練習や勉強会を行うなど、共に学べる環境にいることはとても幸運だと思います。

ドイツを理解するためには、学業だけでなく、交友関係や人脈を広げることも大切です。最初の数ヵ月、ドイツ人とルームシェアをすることで、同居人を始め幅広い友人の輪ができ精神的な支えになっています。一緒に料理をしたり、飲みに行ったりすることでドイツ人の考え方が徐々にわかるようになってきました。１日、１週間があっという間に過ぎ、充実した日々を過ごしています。「ドイツ語を使って、日独関係の緊密化に貢献したい」という初心を忘れず、研修後の在外公館勤務で役に立てるよう、今後も努力していきたいです。

日本の文化に関心を持ち、理解して受け入れる柔軟な心に刺激を受ける

入省3年目

2011年入省
在インドネシア日本国大使館
外交官補

柏原 圭吾

研修語：インドネシア語

ジョグジャカルタという街で、インドネシア語習得のため在外研修に勤しんでいます。最初の半年は語学学校、その後は現地の大学院で語学を強化し国際政治を勉強しています。本省で集中的に語学研修はしていましたが、当初は講義の内容が掴めず、スラングを多用する友人の速い会話にも加われずに歯痒い思いでした。それでも日が経つごとに、少しずつ活きたインドネシア語を身に付けることができています。

インドネシアでは島や地域ごとに独自の宗教・文化が育まれており、その中で培われた人々の優しさと寛容さ、「非物質的な豊かさ」に日々刺激を受けています。また、若い世代を中心に日本への関心が高く、家電やゲーム、漫画、アニメ、音楽、食、伝統文化まで日本文化が幅広く受け入れられています。異なるものを排除せず、理解しようとする柔軟な姿勢には学ぶところが大きいです。日本への留学・就職を希望し、日本語を学ぶ友人も少なくありません。

書道パフォーマンスや日本語の授業などを通して、現地の人々との交流を図るたびに、国や宗教、人種の壁を越える文化の力の偉大さを実感しています。今後も両国の友好関係深化に貢献できるよう、研修を最大限活用し、在外公館勤務に向けて準備を進めたいと思います。

Training Report

在外研修レポート

2~3年の在外研修で語学　力を磨き、外交官として必要な知識を学ぶ。

眺めのいいボドルムの街から。

2011年入省
在トルコ日本国大使館　外交官補

中西 良介

研修語：トルコ語

その国の大きな転換期の真っ只中に、現地で研修する貴重な経験

入省して中東第一課と海外邦人安全課で勤務した後、トルコでの在外研修がスタートしました。1年目はエーゲ大学で語学の基礎を、2年目からはアンカラのハジェテペ大学大学院でトルコ外交と国際関係を学んでいます。英語もあまり通じない国での生活は非常に不安でしたが、感じたことを素直に伝えていくうち、スッと気持ちも晴れてきて、学習面においても先に進むことができたように思います。

その国と人を理解するには実際に赴き、触れ合うことが重要で、時間を見つけては地方都市に足を伸ばし、この国を肌で感じるように努めています。トルコはいま大きな転換期を迎えています。20~30年前からすると別の国と見間違えるような発展を遂げ、その変化は人の意識や国の方針、外交にも見ることができます。この時期に、現地で研修できるのは大変幸運でした。

数ヶ月後には在外公館勤務となりますが、これはプレッシャーでもありモチベーションにもなります。これまでの研修中では、様々な人と出会い、時には衝突し、思い至らなかった観点を知り、お互いをより理解しようと壁を乗り越えてきました。外交は国や組織の間で行うものですが、その現場は人と人との対話の連鎖でできています。相手国を知ることはもちろん、人との関係を大事にできる外交官となって、日本そして世界の人々、次世代によりよいものを残せる仕事をしたいと思っています。

イズミールのエーゲ大学での研修風景。

ソウルの仁寺洞にて伝統茶を楽しむ。

2012年入省
在大韓民国日本国大使館　外交官補

片野 桃子

研修語：朝鮮語

世界各国の友人と集い、小さな国際会議を開く楽しさ

私は今、ソウルの延世大学で韓国語を学んでいます。本省での実務研修で勉強していたものの、実践経験はほぼゼロで、赴任当初は日常会話もままならず、学校でも余裕がありませんでした。韓国語は敬語が多様で、場面や状況に応じた使い分けが重視されています。討論にも敬語が必要なのですが、日本語とは似て非なるもので戸惑うことも。約半年が経過し、韓国語で意見交換をする機会も増えてきましたが、世界各国から来た友人と小さな国際会議を体験しているようで、今は難しさよりも面白みが大きいですね。

語学力向上と共に大事にしていることは、韓国という国を身を持って知ることです。釜山(プサン)や慶州(キョンジュ)など地方都市を旅したり、「日韓交流おまつり 2013 in Seoul」にボランティアとして参加し、浴衣の着付けを担当しました。浴衣ブースは長蛇の列で、日本文化に対する関心の高さが嬉しかったです。今後も旅行やボランティア活動などで視野を広げ、理解を深めていきたいと考えています。

2年間の研修をどのように過ごすかは各人の責任です。韓国語をマスターしつつ、韓国を理解するには時間がいくらあっても足りないと感じるからこそ、今この瞬間を大切に過ごせているのかもしれません。これからも初心を忘れず、日本に貢献できる外交官を目指して努力していきたいです。

ソウル、延世大学での研修風景。

エリザベス女王が週末を過ごす最古の居城、ウィンザー城にて。

2011年入省
在英国日本国大使館　外交官補

弘瀬 奈美

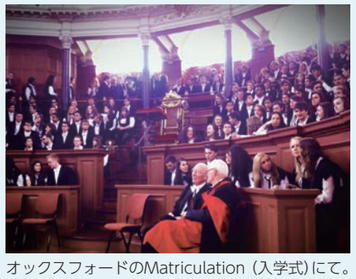
研修語：英語

各国の外交官と一緒に学び、在外公館勤務の際は即戦力に

2012年より研修でイギリスに住んでいます。礼儀正しいお国柄と同じ島国という点に親近感を感じながら過ごす日々で、2年間腰を据えて勉強できるありがたさを感じています。

1年目はロンドンの大学院で文化外交などを学び、2年目の今はオックスフォード大学の外交官用コースで、欧米・アジア・アフリカ各地域の若手~中堅の外交官たちと国際法、国際経済、国際政治学を主に学んでいます。意見交換では常に日本の立場や考え方を尋ねられるので、外交官補として自国を見つめ直すよい機会にもなっています。オックスフォードには政界・財界・学界などの著名人が講演に訪れ、ロンドンとはまた違う刺激的な環境です。毎日の膨大な量の課題に睡眠時間を削られ、ディベートでは語学力に焦りを感じ、優秀な級友と比較しては落ち込むことも多いですが、初心を思い出すことで頑張れます。研修後の在外公館勤務で即戦力となれるよう語学と知識を習得し、いよいよ外交の第一線で働けることに大きな意気込みを感じます。

この研修で得た経験、尊敬する友人との出会いはかけがえのないもの。人間としても成長させてもらえました。どの国で勤務することになっても、日本と世界各国とのよりよい関係構築に貢献できる、魅力的な外交官になるべく今後とも努力していきたいと思います。



オックスフォードのMatriculation（入学式）にて。専用のガウンを着用。

家庭教師との個人授業風景。

2011年入省
在ロシア日本国大使館　外交官補

市川 真之

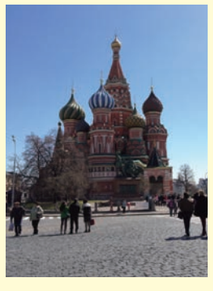
研修語：ロシア語

現地だから肌で感じる、対日イメージなどに驚くことも

2012年の夏からモスクワ国際関係大学の準備学科に通い、家庭教師についてロシア語漬けの生活を送っています。研修も後半になり、情報収集や通訳など在外公館で不可欠なスキルを磨く毎日ですが、入省までロシア語に触れたことすらなく、実践レベルにすることにプレッシャーを感じています。

ロシアの暮らしは不便も多々あるものの、一度信頼を得ると、人々は暖かく親身になって接してくれます。驚いたのは、対日イメージが極めて良好ということ。モスクワでは日本人と分かると、日本製の車や電化製品、柔道、最近見たアニメまで、自分がどれだけ日本の「ファン」であるかを力説してくれるのです。ロシアでの日本の地位向上は外交官の重要な任務です。しかしそれ以上に、いかに日本においてロシアへのネガティブな印象を払拭し、日露関係の発展に貢献するか。こうした問題意識を得られたのもモスクワ研修の賜物でした。

語学の上達と文化への精通のために、現地の新聞やテレビなどに触れ、家庭教師と徹底的に議論しています。また、モスクワなど大都市の他、ロシア各地の視察を行っていますが、特に田舎は人の気質や話す言葉だけでなく、ボルシチの味まで異なります。貴重な研修期間の中でロシアの事象に通じたスペシャリストとして、肌で感じたことを自分のものにするため日々努力しています。



モスクワ赤の広場、ワシーリー寺院にて。

研修語
タイ語

ジェネラリスト志向から メコン地域のスペシャリストへ。 日本との絆の強化を目指す。

本　省　国際協力局
気候変動課　課長補佐
メコン地域専門官※
川村 真紀

1993年入省。タイで在外研修後、2回の在タイ日本国大使館勤務を経験。本省では、3回の南東アジア第一課での勤務、経済協力局（当時）での勤務を経験。2011年から現職。

※専門職員等の専門性のさらなる向上のために、隔年で特定地域・分野の専門官を認定する省内の制度。

2009年、来日中のプラソップスック上院議長と岡田克也外務大臣（当時）の会談の通訳を担当。

タイのスペシャリストとなって18年 専門性と同時に広い視野が必要

私はもともとジェネラリスト志向で、研修語として国連公用語を希望していました。入省後はタイ語を研修することになり、2年の在外研修ののち在タイ大使館に2回、合計5年勤務しました。これまでの本省内でのタイを含むメコン地域関連の業務経験を合計すると18年に及びます。2013年にタイを含むメコン地域の専門家として、メコン地域専門官にも認定されました。当初の希望とは違うキャリアパスとなりましたが、今は満足しています。

私の場合は語学力だけでなく、知識や経験も圧倒的にタイに偏っています。しかし、メコン地域は、経済のみならず、社会・文化面でもますます相互の連結性が深まってきているので、今後はタイ以外の国についても学び、経験していきたいと思っています。

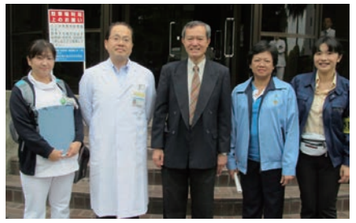
現在所属している気候変動課では、初めて国際交渉のマルチ外交に携わることになりましたが、国際場裡でのメコン地域やアフリカと日本の関係を担当し、より広い観点で物事を捉えることを勉強するいい機会となっています。地域・国の専門家としての専門性の研鑽に軸足を置きながら、同時により広い観点から物事をみることができるような発想の柔軟性も大切にしたいですね。

歴史的瞬間に立ち会うことは多い 東日本大震災では両国の懸け橋に

専門職員として、やりがいを感じるシーンは数多くあります。例えば、歴史的な現場に居合わせ、その時その場所でしか入手できない情報収集・分析ができたとき。2006年にタイで発生したクーデターでは、大使館での2年間の勤務で500件を超える報告を現地から行いました。

東日本大震災の際、タイから支援物資を我が故郷仙台を含め被災各地へ80回以上にわたり配送する調整を行ったときは、両国の絆を強化することに役立てたと思いました。また、通訳をした相手から「君なしでは成功しなかった」と感謝されたり、似顔絵が趣味の相手国の要人から私を描いていただいたときなどは本当にうれしかったですね。

キャリアを積んだ今も、常に基礎的な能力を向上させるように意識しています。しかし、自分の実力もさることながら、仕事の中で出会った日本や海外の方々との人脈に救われることが多々あります。2013年に東京で行われた第5回日本メコン諸国首脳会議では、これまでのネットワークを最大限活用して成果文書の準備・調整を行いました。人との信頼関係を大切にすることは、最終的な目的を達成するために必須だと感じています。



東日本大震災の際は、タイと福島県立医科大学の医療チームが一緒に福島県内の避難所を訪問した。

「この人に聞け」と言われる存在に 男女の別なく活躍できるのも魅力

外務省における専門職員は、地域または分野の専門をもって、継続的にそれに携わり続けることが求められます。「この人に聞け」といった存在にならなくてはいけません。また、日本の外交を支える土台として、政策の内容を理解した上で、その効果を最大限に引き出す事業や行事の企画・立案・実施ができるという実行力も必要です。

国益や日本人の利益のために働く場所ですから、他の仕事では得られない手応えや高揚感がありますね。また、外交問題にとどまらず、文化・報道関係などさまざまな分野の方にお話を聞く機会が得られ、自分自身の視野を大きく広げることができます。時間の拘束も長く、過酷な勤務状況を乗り越えるために、それらがやりがいや心の支えにつながっていると思います。

男女の別なく、責任ある仕事をまかせてくれるところも魅力だと思います。決して楽な仕事ではないですし、海外駐在などでどうしても家族に負担をかけてしまうことも。しかし、男性でも女性でも家族との関係を大事にしながら、仕事で活躍するための制度がどんどん整えられています。ぜひ挑戦してみてほしいですね。

研修語
スペイン語

相手国のために奔走し、 「日本ありがとう！」の声を聞いて 思わず涙ぐむ体験も。

本　省　中南米局
中米カリブ課　地域調整官
牧内 博幸

1980年入省。スペインで在外研修し、本省では欧州局と経済局での勤務を経験。在外は、在ペルー日本国大使館、在コロンビア日本国大使館、在ベネズエラ日本国大使館など計８ヶ所で勤務。2012年から現職。

日本のODA（政府開発援助）を使って学校を建設。

世界で重要視される外交官 歴史を動かす人物に会うことも

私は外務省に入って33年、そのうち24年間は外国で勤務をしています。長い大使館勤務では、中南米地域の専門家として日々の学習やフィールドワークをしてきました。現在は、中南米局の地域調整官として地域全体を見る立場におり、コロンビアとの経済連携協定（EPA）の交渉を主にしています。ビジネス環境整備、持続的発展（環境と労働）、協力、競争の合計4つの章を担当し、コロンビアの外交官と交渉するのですが、歴史や文化、考え方の違う両国間で意見が食い違うことも多々あります。そこは色々知恵を巡らしつつ、常に相手と友好的に冷静に、ときにはユーモアを交えて話し合うことを心掛けています。

外交官という仕事の特長のひとつは、世界中の優れた人達と知り合いになれることですね。世界をリードする日本の代表として、誰もが私たちを重要視してくれます。キューバ勤務のころ、当時のフィデル・カストロ国家評議会議長と何度もお話しする機会がありました。歴史を動かす人物が、日本の若い一外交官の話に真剣に聞き入ってくれる姿に感動しました。異なった文化を背景とした人と友達になり、通常会えない人物とも巡り合える職場だと思います。

他に類を見ない仕事だから 積める経験が幅広くなる

入省して何より満足しているのは、仕事が非常に変化に富んでいることです。外国に住む日本人のお世話をする部局、外国との政治関係・外交関係を扱う地域局、条約を扱う国際法局等々、種類の異なる部署が多く、2～3年の異動を通じてさまざまな経験を積むことができます。そして数多くの海外出張の他、1ヶ国3年前後の期間での外国勤務があるなど、こんな職場は他にないと思います。

ときにストレスを感じることはありますが、常に学びの姿勢で前向きに行けば、得るものは多くあります。もちろん、困難や悩みにぶつかることもありました。外国では相対的に相談する人が少なく、自分自身で解決しなくてはいけないことが増えてきます。毎日の生活の中である程度解決・解消することも重要で、仕事以外に没頭できるものや趣味を持つこともいい方法だと思います。

私はボリビアで先住民の楽器のケーナを習いました。必死に楽譜を追って音を出していくと、悩みは忘れてしまいます。長い歴史と伝統のある楽器を自分の体で操り、音を奏でることで、その国の文化や生活の一部を再現・実感することができます。ケーナの先生に先住民の音楽が生まれた歴史を聞いて、その国と国民をより深く理解でき愛着が深まりました。

アチャカチ市小学校校舎引き渡し式でモラレス大統領とテープカット。

相手国の役に立ち感謝される それは日本代表としての誇り

中南米の田舎を訪問すると、学校がなく学習できない子供や、病院がなく治療できない病人が沢山います。学校があれば、病院さえあればと手助けを頼まれます。そのために必死になってプロジェクトを形成し、建設まで漕ぎ着けたときの地元住民の笑顔を見ると、援助をしている私たちの方が元気を貰えます。「日本ありがとう！よくやってくれた！」と声をかけられて、本当に感謝されているのだなと実感し涙が出るほどでした。苦境に立つ人々の橋渡しができるよう、もっと頑張らなくてはと決意を新たにもしました。この時ほど、日本の代表としての誇りを感じたことはなかったと思います。

外務省を目指す皆さんには、「足下を掘れ、そこに泉あり」という言葉を贈ります。何でもいいので、今やっていることを徹底的にやってみる。または、淡い希望があるのなら、そのために何をしたらいいのか調べて、実現のために小さな一歩でもまず行動を起こす。そうすればその先に何か具体的なものが必ず見えてきます。

仕事に貴賤上下はありませんが、仕事が私たちに与える価値は明らかに違います。世界観を広め、国際的な環境の中で自らを育てたいと思う人に、ぜひ入省してほしいですね。

研修語
仏語

日本が国際社会で輝き続けるため、知恵を出し、実行する。

本　省　北米局
日米安全保障条約課　課長補佐
条約・法律専門官
細野 淳一

1998年入省。フランスでの在外研修後、在ケニア大使館、在フランス大使館、国際法局国際法課、経済局国際貿易課世界貿易機関紛争処理室を経て、2011年5月から現職。

2007年7月，国際海洋法裁判所で日本がロシアを提訴した「第88豊進丸事件」、「第53富丸事件」の口頭弁論の様子。

通訳業務も外務省員の醍醐味のひとつ。今は「退役」しましたが、仏語の通訳を務めたこともありました。2010年3月の岡田外務大臣（当時）のハイチ訪問の際の様子。

世界に貢献する知恵を出せる国、日本。

「明治維新後、弱肉強食の国際社会を生き抜き、敗戦後も奇跡的な復興と経済成長を遂げ、先進国として国際社会で大きな役割を果たすに至った日本を、このまま自信も自負も失うに任せていていいのか。むしろ、世界システムの維持・発展や国際社会の平和と安定に貢献すべく、知恵を出し続けられる国であるはずだ。このために、自分自身も内外の人々との関係の中で自分を鍛えて、世の中に貢献する知恵を出せる人間になれないか。」

少し大げさに聞こえますが、バブル経済崩壊後、景気が上向かず、日本社会全体が自信を喪失し、悲観論と閉塞感に満ちた1990年代後半に学生時代を過ごした私が外務省を志望することに決めた頃、こんなことを考えていました。私は、ここ10年ほど国際法に関連する仕事を多く手がけてきていますが、この分野はあの時の思いに十分応えてくれています。

外務省の「基幹産業」のひとつとしての国際法。

私がこれまで携わった国際法関連業務の一部をご紹介します。まず、国際法局国際法課では、海洋法、漁業、刑事法等の担当官として、国際刑事裁判所への加盟をはじめ様々な案件に携わりました。特に印象深いのが、ロシア当局に拿捕された我が国漁船の早期釈放に関する国際海洋法裁判所への提訴です。国際裁判での提訴の先例がほぼない中で、提訴に向けた国内の意思決定や、訴状や口頭弁論における発言内容等の作成作業を、文字どおり不眠不休で行いました。このプロセスで、内外の著名な国際法学者の先生方に直接助言を仰ぐ機会に恵まれたのは得がたい経験となりました。

その後、経済局国際貿易課世界貿易機関紛争処理室で、主にWTO紛争解決制度における個別通商紛争案件を担当しました。WTO紛争解決では、例えば英語の前置詞の”for”の文言解釈が論点になるなど、極めて緻密な議論が展開されますし、また、相手方から手続上の誤りを突かれることもあります。さらに、結果が個別企業の経済的な利害に直結し得ることなども考えると、非常に神経を使う仕事です。しかし、国際約束の解釈と実施の最前線で、各国のこの道何十年のつわもの達の中に身を置いたことは大いに刺激的でした。

現在所属する北米局日米安全保障条約課では、安保協力班で弾道ミサイル防衛、宇宙協力、防衛装備・技術協力等を担当しており、これらの分野における米国との協力の推進や、そのための法的枠組の構築や運用を担当しています。特に、宇宙分野は、近年安全保障上の新たな分野として重要性が増しており、この分野で米国との協力に関する枠組みを構築できたことは、ささやかですが新たな一歩となりました。

国際法を創る、国際法の意味を解釈する、国際法を使って主張する、そして、これらのために国内調整をしてスタンスを固める、外国と交渉する。こうした国際法関連業務は外務省の「基幹産業」のひとつです。最近であれば，転換期にある我が国の安全保障政策や、ＴＰＰをはじめとする経済連携の動きといった大きく報道されるような事柄の進展も、この「基幹産業」が支えています。

自分がもう一歩前に踏み出すことで、日本を更に前に進める。

しかし、国際法は外務省が扱う幅広い業務のひとつに過ぎません。外務省には職種にかかわらず、様々な言語・地域や機能的分野で経験と知見を積んだ百戦錬磨のプロ達がいます。その中で、専門職員は、自らの知識と経験を頼りに、仕事の実質的な中身を練り、その実現のための進め方を考え、上司や省内の同僚と共に、また、他省庁をはじめとする内外の関係者と協力して、仕事を前に進めていくことがその役割と言えます。

そのために大切なのは、たゆまぬ勉強と広い視点だと自省を込めつつ思います。自らの業務や専門分野に関する勉強なしに、仕事を進めていくことはできません。その一方で、担当分野や勉強したことを、日本の対外政策や国際情勢など、より広い全体的な視点の中で適切に位置付け、意味付けができなければ、いくら物をよく知っていても単なる事情通に過ぎません。

そして、我々は実務家です。勉強して、世の中を眺めて、評論しているだけでは仕事をしていることにはなりません。ひたすら実行あるのみ。一つ一つの仕事に対して丁寧に、迅速に、前向きに取り組む。そして、蛮勇を振るってもう一歩、いや、できればもう二歩分ぐらい前に足を踏み出して歩き、日本が少しでも前に進むのに貢献する。やってやろうじゃないか、と思ったあなたの挑戦を待っています。

研修語
米語

米国政治を深く知るためには現地へ赴くことも必要。いくら学んでも終わりはない。

在外公館　在サンフランシスコ
日本国総領事館　領事
早川 瑞穂

1990年入省。アメリカで在外研修後、在マレーシア日本国大使館で勤務。帰国後は総合外交政策局、経済局で勤務した後、在英国日本国大使館、北米第一課での勤務を経て、2013年から現職。

サンフランシスコ市内で第40回日本語弁論大会を開催。（共催：在サンフランシスコ総領事館、北加日米会）

大統領選にも影響する州で2つの班の仕事をこなす

私は現在、サンフランシスコ総領事館で総務班長と政務班長を兼務しています。総務班は、総領事館のさまざまな業務がスムーズに動くよう気を配り、必要なときは各部署の支援をする仕事です。サンフランシスコには日本以外も多くの国が総領事館を設置しているほか、アメリカの国務省の地域事務所などもあります。総領事や首席領事の代理として、他国の総領事館や国務省が開催する行事に出席することも多いですね。

総領事館ではカリフォルニア州の中・北部とネバダ州を管轄しているのですが、政務班は2つの州の政府および議会の関係者や、日系アメリカ人の方々との関係を維持し構築しています。また、カリフォルニア州には有力議員が多く存在しており、ネバダ州は共和党と民主党の支持者の数が拮抗しているため、大統領選挙の際にはいわゆる「スイング州」の一つとして、その結果が勝敗に影響を与えることで注目されています。それぞれ連邦レベルでの政治に影響力があり、州の政治状況をフォローすることも仕事のひとつです。

国内でアメリカ政治に携わりサンフランシスコでの勤務を希望

2013年の7月までは、本省で北米第一課の米国政務班に勤務していました。ここでは、オバマ政権の誕生直後から中間選挙、大統領選挙を経て、第2期オバマ政権で主要な閣僚・大使人事が行われるまでのアメリカ国内政治の1サイクルをフォローし、資料の作成などを行いました。アメリカ国内で起こる出来事の事実関係だけでなく、それが政権に与える影響や政治的な意味合いを外務省内外から照会されることも多く、日々のニュースを追ってはそれを咀嚼する、という繰り返しを毎日続けていました。

ここで得たアメリカ政治の知識をさらに深めたいと思い、アメリカ勤務を希望してサンフランシスコ総領事館に赴任することになりました。ここに来て初めて、地方には地方の政治が動いていることや、地方の住民にとってワシントンDCでの政治動向は私が思っていたほど身近なことではないのを実感し、日々非常に勉強になっています。北米第一課では、政治情勢のフォローの他、日系アメリカ人を日本に招聘するプログラムなども担当していたのですが、それを通じて知り合った日系人の方々とサンフランシスコで再会することができたのもうれしい出来事ですね。

日本語弁論大会で、日本語を教える先生方とともに審査を行う。

常に新しいことが学べる環境で専門職員の知識と経験を活かす

私が外務省を志望した動機は、外国に行って多様な価値観を知りたかったからです。入省後はアメリカでの研修やマレーシア、英国、インド、サンフランシスコでの勤務のほか、東京でも多くの部署を経験してきました。どこであっても仕事相手の行動のベースとなる価値観を知り、自分の考えとの妥協点を見つけるということが基本になるのだと思います。

外務省は、常に新しいことを学びたいという人にはよい職場です。もう勤続20年以上になりますが、いつでも勉強ができ、様々な国で多くの尊敬できる人に会えることや、男女の別なく働けることはこの職場の特長だと思います。仕事の種類と大小を問わず、意見や立場の違いを越えて、他の国の人と協力してひとつのことをやり遂げたときには本当に手応えを感じます。仕事上の困難はもちろんありますが、上司や同僚に相談し、知恵や支援を得ることで解決することが多く、また先輩から経験を踏まえた助言を得て、心の持ちようが定まったりします。

特定の分野で誰にも負けないような知識を持つのが専門職員であり、そうなりたいと漠然と考えていましたが、今は役立つ知識を活用しやすいように提供できることが大事であり、難しいことだと意識が変わってきました。アメリカについては、いくら学んでも終わりがないと実感しています。日本ではわからなかったことを知り、継続して何らかの形でアメリカに関わっていきたいと思っています。

研修語
ポルトガル語

担当するテーマによっては省庁を超えたチームで追いかける。人と関わるスキルが重要。

在外公館　在ジュネーブ国際機関
日本政府代表部　二等書記官
経済専門官
白石 知子

1996年入省。ポルトガルで在外研修後、在ポルトガル日本国大使館、在ジンバブエ日本国大使館で勤務。帰国後、有償資金協力課（当時）、国際貿易課、経済条約課での勤務を経て、2011年から現職。

ITA（情報技術協定）拡大交渉会合後のジュネーブ代表部主催レセプション。韓国大使、カナダ大使、小田部ジュネーブ代表部大使と。

WTO本部大会議室（CR）にて。

日頃は気づかない同僚の豊かな知識や経験に驚かされる

私は今、ジュネーブ代表部でWTO（世界貿易機関）を他の同僚とともに担当しており、WTOの諸会合に参加し、政府の方針に従って日本の立場を表明する仕事を担当しています。WTOは、貿易障壁の削減に向けたメンバー間での交渉、世界各国の貿易政策のモニタリング、貿易に関する紛争の解決を主要な機能としています。私の役目は、WTO事務局や他の代表団から情報を収集しながら、自分の感触を踏まえて、今後の方針を策定する留意点を外務本省に報告することです。

外務省での仕事は、幅広い分野で継続的な努力が求められますが、自分の知識や経験が直接仕事に活かされる職場です。また在外公館勤務では、外国にあって日本を代表するという立場を経験することになります。自分の見聞を深めることはもとより、これまでいかに日本のことを知らなかったかを痛感し、外国における日本のイメージがどのようなものかを意識するようになりました。

もともと「外国との交渉に携わる」という漠然とした夢を持っていたので、それは叶ったことになりますね。専門職員は、年齢や性別にかかわりなく専門性が評価され、貢献が求められます。身近な同僚が、普段は表に出ないような意外な知識や経験を備えていて、驚かされたりすることもこの職種のおもしろさかもしれません。

身につけた研修語を話すことで要人の表情も思わず笑顔に

私の研修語はポルトガル語です。今、通常の業務は英語で、生活ではフランス語を使っていますが、ジュネーブの町にはポルトガル人の移民がとても多く、ポルトガル語が思わぬところで役に立っています。また、ブラジル人であるアゼベドWTO事務局長や、ポルトガル語圏アフリカ諸国の代表団と時々ポルトガル語で会話をすると、相手の表情はいつもと違う笑顔に。母国語を解する外国人を身近に感じるのは、世界共通であると感じます。

20代のときは、6年以上日本を離れてポルトガル語諸国との関わりに専念していたため、経済分野に初めて触れたのは入省後10年近く経ってからでしたね。たまたま、WTOドーハラウンドにおける鉱工業品の市場アクセス交渉を担当することとなり、省庁を超えたチームで3年近く交渉を追い続けましたが、いよいよ合意間近という時になって意外な論点で足止めとなり、ドーハラウンド全体の妥結を逃すという出来事がありました。その瞬間を目にしたことが原体験となり、複雑な経済交渉の世界をより深く知りたくなりました。その後も、継続して経済分野の課題に取り組む機会を与えられ、現在はジュネーブ代表部で経済専門官として業務にあたっています。

WTO事務局の担当者と第9回WTO閣僚会議の打ち合わせ。

個人の資質を磨くことはもとより信頼関係を築けるかが肝心

外交は責任ある仕事ですので、壁にぶつかり悩むことも少なくありません。そんなときは、とにかく職場の先輩や同僚に相談します。夫が同期入省の専門職員なので、雑談しながら問題が片付いてしまうことも。私も周りに気を配り、必要な時にさりげなく助言ができるような存在を目指したいと思っています。

今後は、貿易、投資のルール・メイキングの他、世界経済に影響を与える要因を分析し、先進国、新興国、開発途上国、いずれも繁栄を享受できるような経済政策の立案にかかわっていきたいですね。外交官は、突発的に物事が動いても即座に対応できるよう備えていなくてはなりません。相手からの信頼を得ること、そのため、日頃から誠意ある対応に努めることが大切だと思います。また、家族と離れての海外での勤務においては、特に心身の健康の維持にも気を遣います。会議や交渉の準備で緊張が続く時期には、その先の休暇のことを考え、それを励みに乗り切るようにしています。

これから専門職員を目指す方には、学生生活を通じて、知識の習得だけでなく、友人とのかかわりを大切にしてほしいです。個人の資質もさることながら、困難な局面では信頼関係を築いてチームで乗り切る必要があるので、相手の身になって考えられる力をぜひ養ってください。

研修語
米語

志を持った専門職員はときには学者のように勉強すべし。そこから可能性が見えてくる。

本　省　軍縮不拡散・科学部
軍備管理軍縮課　課長補佐
軍縮・不拡散専門官
西田 充

1996年入省。アメリカで在外研修後、在カラチ日本国総領事館で勤務。帰国後、中南米局で勤務した後、兵器関連物資等不拡散室（当時）、不拡散・科学原子力課、軍縮会議日本政府代表部での勤務を経て、2011年から現職。

2012年に開催されたモスクワ不拡散会議にパネリストとして参加。

とにかく「軍縮不拡散」の仕事がしたい！夢に向かうには努力しかない

私が外務省を志望したのは、「軍縮不拡散」の仕事をしたいという動機からでした。アメリカで在外研修をしていた時代には、国際関係論の中でも軍縮不拡散を中心とする大学院に通い、その後しばらくそれとは関係のない仕事をしていた時期もありましたが、自分で勉強は続けていました。入省後7年目ごろから軍縮不拡散を担当するようになりましたが、軍縮不拡散は安全保障や国際政治と密接に関係しているので、掘り下げた知識が必要となってきます。仕事で直接関わる分野以外についても関連する分野の論文を読むなど、幅広い視点を持つよう気をつけています。

現在の主な仕事のテーマは、核軍縮と核不拡散です。核兵器を保有している国が核兵器を減らし、核兵器を保有していない国が新たに保有することがないように、核兵器に関連する国際的な枠組みを強化したり、構築していくことです。特に日本の平和と安全との関係では、日本周辺の核兵器保有国による核軍縮を進めること。核兵器の開発を行っている北朝鮮については、核計画を放棄・廃棄することが最も重要な課題です。

キャリアを積んでこそわかる経験の大切さと専門職員の可能性

外務省に入ってよかったと思うのは、自分が担当する核問題を含め、国際的な動きや国内の政策決定過程を間近で見られることですね。キャリアを重ねると、外交政策にはあらゆる要素が複雑に絡み合っていることがわかってきます。自分が勉強や経験の中で蓄積したものは、政策を形成する際に貢献できます。若い時に経験した通訳業務も、直接には軍縮不拡散とは関係ありませんが、外交の現場の最前線を体験できたことは、今に活かされていると感じています。

専門職員の仕事は、様々な可能性を秘めていると思います。以前は分からなかったけれど、経験を積んでくるにつれて専門職員の可能性と限界を実感するようになりました。では、どうすれば可能性をさらに広げられるのか……それは、自らの専門分野における研鑽を怠らないことだと思います。謙虚な気持ちで、自ら蓄積した知見で政策形成に貢献する。上からの指示を待つのではなく、常に先々を見て、上に提案をする形で先回りをする。必ずしも納得のいかない方針が示されたとしても、最低一度は自らの意見を論理立てて述べてみる。そのように議論を尽くして下された判断は、より厚みのある政策の形成に繋がり、必ず日本にとってプラスになります。それを続けることが、理想的な専門職員への道ではないでしょうか。

2011年にジュネーブで開催された、日豪両政府共催による兵器用核分裂性物質生産禁止条約（FMCT）の専門家会合。

やりがいのある仕事を続けたいから今までもこれからも常に勉強

自らの立場をわきまえて、黒子に徹することも大切です。私は、意見を求められたらすぐに見解を述べられるよう、自分の直接担当している業務は当然として、軍縮不拡散全般について常日頃から勉強し考えるようにしています。その姿勢は、ある意味で学者に近いところもあるかもしれませんね。

外務省は志をもって仕事ができる職場です。もちろんバラ色の場所ではありませんが、努力と実績が評価されるところです。また、多くの国の人々や文化と関わることで、自分の視野を広げられるやりがいのある仕事だと感じています。

ずっとこの分野に携わっていくためには、とにかく普段から勉強して、常にそのことを考えているくらいの気持ちが必要です。熱望していた場所だからこそ、この貴重な期間を大事にしたいと思っています。

私のキャリアパス

在リトアニア日本国大使館
特命全権大使
白石 和子

外交に携わる者として能力を不断に磨き、使命感を持って行動する。

□ なぜ、外交官を目指したのか

大学ではロシア語を専攻し、副専攻が国際関係だったので、これを活かせる職場はないかと考えていました。男女雇用機会均等法の成立以前で、男女区別のない点が決め手となり外務省専門職の試験を受けました。育児休業もない時代に、子育てに配慮のある上司に恵まれ現在に至っています。この男女の区別がないという伝統は、男性職員が育児休業を取得することが当たり前のように受け止められる現在にも受け継がれていると思います。

□ ポーランド専門家への道

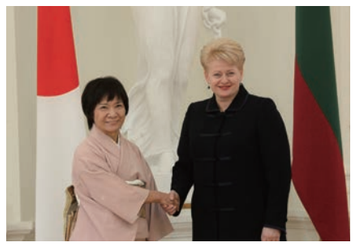
外務省ではポーランド語の研修を命ぜられましたが、辞書もなく専門の教育者もいない中で学ぶことは挑戦でした。ポーランド市民は、戦後民主化や自由を求めて何回も立ち上がり、そのたびに当局に押し込められてきました。しかし1980年に労働者と知識人が初めて手をつないだ労組「連帯」運動が、当局に自主労組や多くの民主化を認めさせることに成功しました。この「連帯」は翌年、ソ連の軍事介入をおそれた当局の「戒厳令」発動により粉砕されました。

私はこのとき、外務省でたった1人のポーランド担当官でした。戒厳令前の自由化に対する支援策、戒厳令後の対応措置など取り組んだ仕事が、わが国の政策として実現することに大きなやりがいを感じました。ポーランドには11年、外務省の担当官として5年と合計16年携わってきましたが、自由を求めて戦ったポーランド人に、大きな敬意の気持ちをいつも持ち続けています。

□ 条約の専門家として

本省では、条約局(現在の国際法局)で3回勤務したほか、経済局の世界貿易機関紛争処理室長も勤めました。私は法学部出身ではないので、条約交渉やWTOパネルで相手国の法律専門家と対等に交渉し、省内から信頼されるためかなりの労力が必要でした。中でも日中投資保護協定、日メキシコ経済連携協定は、最も記憶に残っています。

日中投資保護協定は、数年前に交渉が対立し凍結されていたものを担当官の立場から妥協案を考え、関係省庁と協議して交渉に当たりました。日メキシコ経済連携協定は、サービス分野でより自由化を約するNAFTA(米加メキシコFTA)型の法体系を導入するなど、前例のない条文を大幅に取り入れた画期的な条約でした。パイオニアとしての高揚を条約担当チーム全体で感じながら、署名本書3千ページにのぼる条約を作り上げました。この経済連携協定の結果、貿易と投資が増大し、二国間関係が促進されました。



リトアニア大統領に信任状を捧呈。

□ 専門職としてのキャリアパス

「外交に携わる者として能力を不断に磨き、使命感を持って行動する」ことは、外務省員の行動規範のひとつです。私の場合は「ポーランド」と「条約」の2つの分野に対して努力を傾注してきました。専門性を有することで、自分が携わる業務が日本外交の成果につながることにやりがいを持っています。世界は常に動き、外交の業務には1日として同じ繰り返しはありません。我が国が承認している194ヶ国、それぞれの国と交流があり、それぞれの国に文化があります。外交官は、楽しい職業です。

1974年　外務省入省
1997年　在ポーランド日本国大使館　一等書記官
2001年　在アトランタ日本国総領事館　領事
2003年　条約局国際経済協定室長
2004年　総合外交政策局総務課外交政策調整官
2005年　経済局世界貿易機関紛争処理室長
2007年　在ポーランド日本国大使館　参事官
2012年　特命全権大使　リトアニア国駐箚

2013年、内閣府青年交流事業でリトアニアを訪問した日本の若者と。

人事担当者からのメッセージ

外交が最終的に目指すものは、国際社会の中にあって我が国の安全並びに繁栄を確保し、日本国民の生命と財産を守っていくことです。こうした外交の目的のために日々外務省が取り組んでいる仕事は多岐にわたりますが、外務省員は、常に国益を考え、意識し、歴史的視点と世界的視野に立って外交を進めていかなければなりません。省員一人一人が、世界的な視野で日本の国益を考え、日本の顔として世界の舞台で活躍できるという点で外務省はとても魅力的な職場であると考えます。

外務省専門職員は、地域・言語・分野のスペシャリストとして、本省においてはその専門的知見を活かして外交政策の企画・立案に携わり、海外においては、日本の外交官として相手国政府との交渉や政治・経済その他の情報の収集・分析等に携わり、外交政策を実施する役割を担います。

現在外務省員約5,800名の内、専門職員は約1,600名を数えます。専門職員は入省に際して40数言語の中から研修語が割り振られ、研修語を自由に使いこなすとともに、関連する国・地域の政治・経済・社会・歴史・文化などに通じた地域のスペシャリストとして活躍することが期待されています。また、その後の勤務経験を通じて条約・経済・経済協力・軍縮・広報文化などの専門分野のスペシャリストとして力を発揮する道もあります。

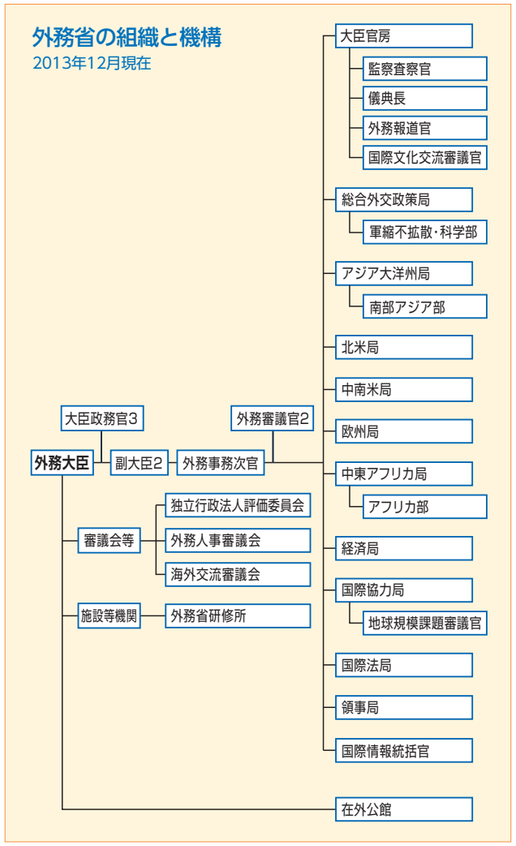
内外の情勢の変化に柔軟にかつ能動的に対応していくため、これまで以上に外務省職員には深い専門的な知識が求められており、地域、国の事情に精通した専門家の役割はよりその重要性を増しています。外交の場面では人と人の関係が重要となることが多く、その意味で個人の力量が問われており、まさに省員一人一人の仕事ぶりが国益を左右するといっても過言ではありません。省員全員が自己の能力や専門性を最大限に発揮してチームの一員として日本の外交を支えていくことが必要です。特に、専門職員が長年の研鑽と経験を通じて培った地域・分野に対する高い専門性がこうした外交の場面でこれまで以上に必要とされているのです。

外務省員の仕事は決して華やかなものではなく、地味で根気のいる仕事が多く、在外公館での勤務の多くは生活環境が厳しい状況にあります。こうした中で日本の国益を考え、大局的な視点に立って日本のために働きたいという強い使命感と情熱を持った志の高い皆さんと一緒に働けることを期待しています。

大臣官房人事課　調査官　伊藤　眞

仕事のフィールド

外務省は、本省と204の在外公館（2013年12月現在）を含め、現在約5,800人の陣容で外交領事事務を担っています。主要国に比べて小規模である上に仕事の内容は多岐にわたるため、一人一人が幅広く活躍し、能力を最大限に発揮することが期待されています。



本省　日本外交の中枢

東京・霞が関の本省は、日本外交の「頭脳」であり「心臓」。日本の平和と繁栄を確保するために、在外公館と緊密に連絡を取りながら、外交政策の企画・立案・実施にあたっています。

本省の組織は、事務全般を総合的に調整する大臣官房、総合的な外交政策の企画・立案・総括を行う総合外交政策局に加えて、経済、国際協力、国際法、領事を分野別に扱う4つの機能局と、アジア大洋州、北米、中南米、欧州、中東アフリカを扱う5つの地域局に分かれています。また、情報の収集・分析を行う国際情報統括官のほか、大臣官房の下に外務報道官・広報文化組織、総合外交政策局の下に軍縮不拡散・科学部、アジア大洋州局の下に南部アジア部、中東アフリカ局の下にアフリカ部がそれぞれ置かれています。これら各部署が互いに連携しながら、流動する国際情勢に機動的に対応し、戦略的な外交を展開しています。

在外公館　外交活動の最前線

世界各地に張りめぐらされた204の在外公館（大使館、総領事館、政府代表部）のネットワークは、外務省の目であり、耳であり、手足。同時に、本省の政策決定に欠かせない情報や意見を提供する貴重なブレーンともなります。

■大使館：基本的に各国の首都におかれ、その国に対し日本を代表する機関で、相手国政府との交渉や連絡、政治・経済その他の情報の収集・分析、日本を正しく理解してもらうための広報文化活動などを行っています。また、邦人の生命・財産を保護することも重要な任務です。

■総領事館：世界の主要な都市に置かれ、その地方の在留邦人の保護、日系企業の支援、政治・経済その他の情報の収集・広報文化活動などの仕事を行っています。

■政府代表部：国際機関に対して日本政府を代表する機関で、国際連合、ウィーンにある国際機関、ジュネーブにある国際機関と軍縮会議などに対する政府代表部があります。

採用情報

※以下の情報は、2013年12月現在のものですので、必ず、外務省採用関連HPで最新の情報をご確認ください。（同HPに業務説明会の日程も掲載しています）

採用までのスケジュール

4月上旬～中旬 申込受付 → 6月中旬 第一次試験 → 8月初旬 第二次試験 → 8月下旬 最終合格発表

試験科目

第一次試験	筆記試験（憲法、国際法、経済学、基礎能力、時事論文、外国語和訳、和文外国語訳）
第二次試験	人物試験（個別面接、グループ討議）、外国語会話試験、身体検査

採用試験実績

（　）内は女性の数

試験年次（平成）	21年	22年	23年	24年	25年
受験申込者	719 (365)	762 (407)	635 (337)	590 (286)	538 (270)
第一次試験受験者	442 (225)	465 (257)	398 (217)	358 (189)	307 (155)
最終合格者	39 (15)	34 (11)	40 (16)	24 (10)	38 (18)

待遇・福利厚生

初任給	203,196円（2013年12月現在）
諸手当	扶養手当、住居手当、通勤手当、残業手当、期末手当、勤勉手当（ボーナス）
勤務時間	7時間45分／日
休暇	土曜日、日曜日、祝日、年次休暇（年20日・初年は15日）、病気休暇、特別休暇（夏期・結婚・出産・忌引・ボランティア等）、育児休業、介護休暇等

専門職員Q&A

Q　どのような人材が求められていますか？

A　外務省は多様な人材を求めていますが、外務省員として求められる資質をあえて挙げるとすれば、日本のために働きたいという強い情熱と使命感に加えて、途上国の過酷な環境でも勤務できるたくましさ、国際社会の多様な価値観を理解し受け入れることができる柔軟性とバランス感覚などです。特に、専門職員については、地域・分野のスペシャリストとして、長期間にわたり専門地域・分野の観察、研究を続け、専門性を磨きながらキャリアを形成していく粘り強い姿勢が求められます。

Q　総合職職員との違いは何ですか？

A　総合職職員は、本省・在外の様々な地域・分野のポストを経験して、管理職さらには幹部職員として活躍することが期待されています。一方、専門職員は、研修語と関連する国・地域の社会、文化、歴史等に通じた専門家、あるいは経済、経済協力、条約、軍縮、広報文化等の分野の専門家として活躍することが期待されています。

Q　研修語はどのように決まりますか？

A　本人の希望を最大限尊重しつつ、能力、適性、語学ごとの採用計画等を考慮して決められます。

Q　在外研修終了後の勤務地は？

A　在外研修終了後は、研修国の在外公館で勤務するか、あるいは研修語を国語（または通用語）とする別の国にある在外公館で勤務することとなります。

Q　外務省専門職員のキャリアパスとは？

A　1年の本省勤務の後、在外研修、在外公館勤務を経験し、本省に戻ってからは、おおむね5～6年ごとに本省勤務と在外公館勤務を繰り返し、本省・在外で活躍することになります。幹部としての才能のある方は、本省の課・室長、地域調整官、企画官、あるいは在外公館の次席、政治部長等を経て、能力や適性に応じて、総領事、大使への道が開かれています。

Q　配属や転勤の希望は叶いますか？

A　能力、適応性、勤務成績、本人の希望等を総合的に考慮し、配属先が決定されます。おおむね2～3年ごとに異動があるため、多様な視点から自分の専門性を発展させながら勤務することができるほか、異なる部署での勤務を通じ、新たな専門分野を発掘することも可能です。

Q　女性の活躍の場はありますか？

A　専門職員の約3分の1、約500名が女性職員です。男女差によって仕事が区別されることは一切なく、開かれた雰囲気がありますし、育児休業などの各種制度も充実しているので、女性も大いに実力を発揮できる職場です。

Q　英語等何らかの語学が得意でないとだめですか？

A　試験科目に外国語試験※が課されていますので、一定の外国語能力は必要です。他方で、採用後に外務省研修所での語学研修及び在外研修の機会が与えられますので、採用時点での語学力よりは、採用後の研鑽によりどれだけ高いレベルを達成できるかが重要です。

※外国語試験は、平成26年度試験では、英語以外の14言語でも受験可能です。詳細は採用試験案内をご覧ください。